

お茶うけ 第72話

犬が信じることを教えてくれた

NHKの「週間ブックレビュー」の番組で、『犬が生きる力をくれた - 介助犬と人びとの物語 -』という本が紹介されました。私は「介助犬」という耳新しい言葉に興味を湧いて、早速、横浜の有隣堂本店で本を購入し、地下のギャラリーで、この本の著者が「介助犬と人びと」を写した「大塚敦子写真展」を観てきました。

この本は、「アメリカの女子刑務所の受刑者が、捨て犬などを収容するアニマル・シェルターにいた犬を、障害者を支える介助犬(SERVICE DOG)に育て上げる」という介助犬プログラムの活動と、育て上げられた犬たちが障害者を支える健気な姿を、幾つかの具体的な事例で紹介しています。

アニマル・シェルターは、街をうろついたり飼い主が処置に困って連れてきた犬や猫を一時的に保護し、希望する人たちに引き渡す施設で、通常1週間以内に引き取り手が見つからない犬や猫には、安楽死という運命が待っています。このシェルターに収容された犬の中から適性があると思われる犬を選び、さまざまな訓練をして介助犬に育てるのです。

介助を受ける障害者は、筋力が弱って生活機能が失われる「多発性硬化症」や、てんかんや神経性などの「突発性発作」の病があって、誰か介助する人が常に傍にいないと生活できない人びとです。この人たちは自由で自立した活動ができないので、家に引きこもりがちな生活を送っています。

介助犬は、そのような障害者(車椅子に乗っていることが多い)に付き添って、落とした物を拾ったり、靴下を脱がせたり、電話の受話器をくわえてきたり、ドアを開けたり、倒れた障害者が起き上がるのを助けたりします。また外出したときは、障害者に代わって、バス料金を口にくわえて運転手に払ったり、エレベータのボタンを押したりします。

なかでも、「突発性発作」の病を持った人を介助するために、特別に「発作予知」の訓練を受けた犬は、被介助者が発作を起こす15分くらい前に発作を感知して、その人を座らせ、その体に覆いかぶさるようにして知らせてくれるそうです。

犬たちを訓練して介助犬に育てる受刑者は、いろいろな事情で殺人や強盗などの重大な犯罪を犯して、数十年の刑期を宣告され服役している人たちです。この人たちの刑務所に入るまでの社会生活は悲惨で、ほとんどが人の温かさに接したことはなく、人を信じることができず、人に対して心を閉ざした暮らしをしてきました。

この本には、受刑者が犬を介助犬に育てる幾つかのエピソードがありますが、どの受刑者も犬を訓練するための共同生活を続けるうちに、育てている犬から生きる力を与えられたと話しています。

受刑者は、シェルターから連れてこられたばかりの犬の体をシャワーで洗いドライヤーで乾かす間、自分を信頼しきっておとなしくしている犬に心を動かされます。訓練に忠実に従い裏切ることが知らない犬に、信じることを教えられます。そして、体を寄せて抱いた犬の温かさ、安心感、心地よさに、かたくなな心を開いていくのです。

介助犬を育てるのには6~8カ月間かかり、その間、受刑者は24時間寝起きを共にして、付きっきりで世話をし訓練します。立派な介助犬に育つと、犬の受け取り手となる障害者が決まるので、受け取り手に刑務所に来てもらって、介助犬に対する指示の仕方や一緒に行動することを教えます。やがて、犬は新しい主人である受け取り手と一緒に刑務所の門を出ていきます。

後に残された受刑者は、手塩にかけて育てた犬と別れるのは寂しくつらいけれども、それ以上に「良いこと」をした喜びがあると話しています。介助犬を受け取った障害者の家族から、障害者が介助犬と一緒に元気に生活できるのは貴女のお蔭ですと涙を浮かべて感謝された時には、「人の役に立つこと」をなし遂げた誇すら感じているようです。そして何年か先、自分が育てた介助犬が老齢になって任務を終える時には、その犬を引き取って面倒を見てやりたいという受刑者もいます。

私は、見捨てられ安楽死させられるところを救われた犬たちが、介助犬となって、障害を持つ人びとを支える健気な姿と、一度は人生に絶望した受刑者たちが、自分を信頼してくれる犬たちによって、人を信じる心を呼び覚まされて、生きる力を取り戻し、社会復帰を目指す姿に、二つの生命が響き合うときの不思議な力を感じました。

以上

参考文献:

『犬が生きる力をくれた - 介助犬と人びとの物語 -』
大塚敦子著 岩波書店 1999年 6月29日 第1刷発行
(この本は、「おわりに - 日本の介助犬」で、日本での事例を紹介しています)

